



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日米農業経営研究会の思い出
Author(s)	新藤, 政治
Citation	季刊農業経営研究, 5, 53-53
Issue Date	1959-01-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36283
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_53.pdf



がないでもないが、今日のわが国の農業経営学が実学の立場を離れ、理論的体系化のみを追う傾向にあることから考え合せ、深く反省させられるのである。

「個々の研究課題は、現実から問題をみつけ、現実の要請に答えなければならぬ」とする Dr. Engene の名調子「How to up the research project sets」, 未だわれわれ参加者に深い感銘を持ちつづけている。サヨナラパーティの席上、Dr. Engene の云った „Men be ractical” という言葉こそ、アメリカの教授達の誰もがその講義の底流に抱いていた信念であり、われわれ参加者の誰れの中にも芽を出し根を張って欲しい一粒の種子であつたろうと推測するのである。(1958. 9. 23)

新 藤 政 治

1ヶ月来にわたる「研究所」に参加して職場に戻ったとき、有意義な充実した期間だった、との気持ちでいっぱいだった。ともかく、大学を出てから、いや大学に入つて以来、この期間位に知識をつめこんだ時はなかつたかもしれない。そうした充足感が非常に強かつた。改めて来日された先生はじめ運営に当てられた方々の労に對し深く感謝する次第である。

本当に多くの事を学んだ。しかもプログラムは断片的でな

く、調査→問題の設定→分析方法の撰択→適用というような順序の中に新しい分析方法の適用の演習や、その背景などが織りこまれていた。そして又、別に毎日一時間半位づつ「ミショートレクチャー」と題してあるトピックを選んで講義がなされた。今になつて折に触れ反芻してみると改めて内容の深さが思ひかえされるのである。

ところが一方で、何だかまともがなかつたという感じがなくもない。ある事柄はむずかしくてよくわからなかつたし、ある項目はすでによく知つていることであつた。大体われわれの知識欲は多少性急であつたかもしれない。語学の障害を乗り越えて、生い立ちも背景も違う外国の学問、それも応用分野の学問を学ぶときは多かれ少なかれ焦りに以た感情はつきものである。しかしこうしたことを認めたとしても「研究所」の成果を多少とも減らした原因として参加者の方にも問題があつたのではないだろうか。

一言にしていえば参加者各自がもつている知識や希望が離れすぎていた。もちろん相違があるのは当然である。ただその差が建設的に働いたとはいえないようである。互に牽制しあい、異質さえ意識してしまつて、そのため討論や講義の内容を曲折させたことが感ぜられる。知識の差というが、私は水準の差を指しているのではない。ある学問の分野が一国で根を下ろし、拡がつていくにつれて、体系もできてくるであろうし、従つて知見の深い浅いの基準もできて

くるようになってくる。又一応の常識というが、基礎的な知識の範囲もはつきりしてくるであろう。ところがこの「研究所」においてわれわれの対象としたアメリカの農場経営の新しい分析方法はわが国ではまだそうなつていない、輸入されたばかりの分野であると思う。こうした場合に全国から集つた参加者から一定の水準なり知識を見出すのは困難である。一人一人の中でも同じことがいえる。自分のことで恐縮だが、私自身、アメリカでは大学前半期で誰でも知つている統計学の知識がなく、Snedecor とか EZKiel とかの名前を挙げられても「聞いたことがある、位の惨めな状態であつた。

今夏の「研究所」における経験はこのような問題について示唆を与えてくれるものである。結論的には参加者の間の知識の深さと質を何らかの方法で狭めるのがよい。例えばアメリカの大学卒の学生が要求される事を予め学んでくるとかの方法で。揃え方をどうするか、どこまでにするかによつて「研究所」のレベル自体も決まってくるであろう。

多くの課題を抱えているわが国の農業経営学が外国の考え方、方法に期待するところも又大きい。この夏われわれのえたような機会が、今後もより多くの人に与えられ、しかもその過程を通じて新しい分野の学問が進歩発展し、わが国の風土に根を下ろすことを望んで止まない。